

アイヌ民族の歴史と文化

第12回

—〈ひと〉〈暮らし〉〈ことば〉からさぐる—

アイヌの装身具



亀丸 由紀子 (かめまる ゆきこ)

北海道博物館アイヌ民族文化研究センター学芸員

1993年北見市生まれ。弘前大学人文学部卒、北海道大学大学院文学院博士後期課程在学中。2018年より北海道博物館勤務、アイヌ民具を担当。特に装身具に関する調査と博物館の業務に当たっている。

◆はじめに

現在、博物館などに残されているアイヌ民具（暮らしの中で使用された道具など）の資料は、大きく分けると次の2つに分類されます。一つ目は、「アイヌ民族が自ら製作したもの」、二つ目は、「交易などによって他の地域から手に入れたもの」です。前者は、「自製品」、後者は、「移入品」などと呼ばれることもあります。博物館の展示などで見られる資料でそれぞれ代表的な例を挙げると、オヒョウやシナノキなどの樹木の内皮からとった繊維を使用して作る、樹皮衣（アイヌ語ではアットゥシなど）や、神々への祈りを捧げる際に使用される、捧酒箸（アイヌ語ではイクパスイなど）などが「自製品」に該当し、漆が塗られた^{うるし}椀や容器、耳飾りや首飾り、刀類などが「移入品」に当てはまります。

今回は、こうした博物館所蔵のアイヌ民具資料のうち「移入品」に該当するもの、特に筆者が研究対象としている装身具を中心にお話しします。

装身具とは？

装身具と聞いても具体的なイメージが浮かびづらいかもしれませんが、いわゆるアクセサリーのことです。筆者は、アイヌの耳飾りや首飾りに焦点を当てて調査を進めています。一般的に、他の分野の資料と比べると、博物館所蔵のアイヌ民具資料には、資料の製作者や収集地といった極めて基礎的な情報が欠けているものが多く、そのため分からないことも多いとされてきました。とりわけ、筆者が対象としている耳飾りや首飾りは、骨董品として取り扱われることが多く、古物商やコレクターの手を介して博物館に収集される例が少なくありません。そのため、元々由来が分かりにくいアイヌ民具資料の中でも、特に情報が少ないタイプの資料に該当しています。

そんなアイヌの耳飾りや首飾りですが、アイヌ文化を紹介する際には取り上げられることも多く、また、博物館などで展示されていることも多いため、実際に目にしたことがある方も多いかもかもしれません。主に“交易によってアイヌ文化にもたらされた”と説明されることが多い耳飾りや首飾りですが、江戸後期頃まで行われた場所請負制に伴う漁場での労働の対価として入手されていたことも分かっています。それぞれどんな特徴があるのか、少し詳しく見ていこうと思います。

◆耳飾り

耳飾りは、アイヌ語ではニンカリなどと呼ばれ、ピアスのように左右の耳に穴を開けて身につける金属製の装身具です。

形や素材の変化

現在、博物館などでよく見られる耳飾りは、今から約150～200年ほど前の伝統的な暮らしの中で使用されたものが多く、形は、円形や「？（はてな）」形のものも多く伝わっていて、金属製やガラス製の飾り玉がつくものも多く残されています。その素材は、真鍮や洋銀（洋白とも言う）などの合金で作られたものがほとんどで、大きさは、直径7～8cm前後のものを中心に、写真1にあるような、3cm前後の小ぶりなものから、10cmを超える大ぶりのものも見られます。



写真1 博物館でよく見られるアイヌの耳飾り(北海道博物館所蔵)

筆者は、以前、博物館所蔵の耳飾りと考古学分野で行われる発掘調査によって出土した耳飾りを対象にして、その素材を分析して両者の情報を比較検討する調査を行い、アイヌの耳飾りの形や素材が、時代と共に変化してきたことを明らかにすることができました。耳飾りの形については、北海道厚真町オニキシベ二遺跡などから見つかっている14世紀頃の耳飾りは「Ω」形をしていましたが、17世紀中頃には円形のものが現れ、続く18世紀中頃には「？」形が加わり、以後、円形と「？」形の2種類が併存していることが確認できました。素材も、14世紀頃の耳飾りでは錫や銀といったものが多いのに対し、年代が新しくなるにつれて真鍮や洋銀といった合金の耳飾りに変化していったことが分かりました。

さらに細かい話をすると、装飾としてつけられている飾り玉も、古いものは無地でただの球状という比較的シンプルなものから、新しいものになると、金属玉ではその形も様々で表面には動植物の模様が施され、ガラス玉は色味が増えトンボ玉など模様が入ったものが使用されるなど、時代と共に凝った意匠を見せるようになっていきます。

身につけ方の変化

そして、時代に伴う変化は、耳飾りの形や素材だけでなく、その身につけ方にも起こりました。伝統的な暮らしにおいては、子どものころに祖母や母親によって耳たぶに穴をあけたとされ、男女の区別なく日常的に身につける装身具だった耳飾りですが、葬儀の際には副葬品として故人とともに埋葬されることもあった

ようです。関連する文献や聞き取り調査の記録を見ると、耳飾りをつけたまま喧嘩をすると耳飾りが引っ張られて耳たぶが裂けてしまう、などという痛々しい話も残されていたり、また、こうしたことを防ぐために、耳たぶに穴をあけて間もないころや、山に入るときには、金属製の耳飾りの代わりに紐や布を通しておくこともあった、などという興味深い記録も残されています。

しかし、時代が進み、1871(明治4)年に開拓使が男性の耳飾り着用を禁止してからは、耳飾りを身につける人は徐々に減っていきました。現在では、主に女性が、耳に穴をあけて着用する代わりに、儀式などで正装する際に頭に巻く鉢巻きに耳飾りを縫いつけたり、通常のピアスと同じくらいの太さや大きさに作られた製品を購入するなどして身につけることもあります。



写真2 この写真は1960年代後半頃に平取町で撮影されましたが、写真に映る女性は耳飾りがついた鉢巻を身につけていることが分かります(個人蔵)



写真3 現代風にアレンジされた耳飾り(個人蔵)

今後の研究への視点

筆者は、現在、耳飾りの工法（作り方）や製作状況、流通といった事に関する調査を進めています。これまでの研究では、本州で作られた耳飾りの部材（部品）にアイヌが手を加え、組み合わせて製作した、と考えられていました。しかし、江戸時代の終わり～明治初期頃の文献を詳しく見てみると、完成品である耳飾りを和人から手に入れていた、という内容を示す記述が見つかりました。

また、実物の耳飾りをよく見てみると、金属を加工する際の折り曲げ方、飾り玉の規格やその留め方などかなりの統一感や規則性が見られるなど、耳飾りの製品化を裏付けるような発見がいくつかありました。

◆首飾り

耳飾りが男女ともに身につける装身具であったのに対し、首飾りは、伝統的な暮らしにおいて、母から娘へと伝えられる女性の宝物でした。ふだんは家の中の宝壇（家の一角に宝物を並べて置いていた場所）にかけたり、宝壇にある漆器類の中に入れて大切に保管されていました。儀式の際には女性たちが身につけるほか、儀式に使用する祭壇を飾りつけるため、祭壇にさげられることもありました。アイヌ語では、タマサイなどと呼ばれますが、玉だけを連ねたものをタマサイと呼び、首飾りの下部（装着時に胸の辺りとなる箇所）についての飾り板のことをシトキ、あるいはその飾り板がついた首飾りそのものをシトキ、などと呼ぶこともあります。

部材の変化

現在、博物館に残されている首飾りは、主に、大陸や本州から入手したガラス玉が使用されています。少し濁った水色や青色、黒色のガラス玉がよく使われますが、他にも白色や透明、トンボ玉などカラフルなガラス玉が入ったものもよく見られます。ガラス玉以外では、鉛・錫・真鍮などの飾り玉や、中国や日本の古銭、切羽などの刀装具の部品となる金属製品を通した首飾りもあり、中には、ヒグマの牙が部材として使用されているものもあります。

最近の研究では、こうした首飾りの部材も前述の耳飾り同様、時代とともに変化してきたことが分かってきました。ガラス玉を例に挙げると、17世紀以前の首飾りには、直径が1 cm以下の小ぶりで比較的透明度の高いガラス玉が多く使用されていましたが、18世紀以降の首飾りは、直径1～2 cmほどの中玉が主流で、ときに4 cmを超える大玉が使用されるなど玉の大型化が進み、色味も透明度が低いものになっていったようです（関根 2014）。

また、シトキと呼ばれる飾り板についても、古くは、和人から手に入れた和鏡や刀の鏝、漆器の蓋などを飾り板としていましたが、のちに和人がアイヌ好みの飾り板を意識して製作したものが飾り板として使用される、など時代に伴う変化が起きました。

玉をつなぐ「紐」すらも情報になる？

このように、資料としての情報が少ないとされる首飾りについても、ガラス玉や飾り板など、首飾りを構成する部材や要素を細かく分析・検討することで新たな情報を蓄積し、その情報を元に首飾りが製作された時期などを絞り込むことは十分可能だ、と筆者は考えています。

ややマニアックな話になりますが、そうして首飾りを見ていく上での重要な手がかりの一つとして、ガラス玉などの部材をつなぐ「紐」の存在があります。博物館所蔵の首飾りには、古いものだといラクサなど植物の繊維を使用した紐や手拭いなどを割いて紐にしたものが多いのですが、麻紐や尻糸のように太い木綿糸など、やけに新しそうな紐が使用された首飾りが一定数確認できます。こうした真新しい紐の首飾りは、紐が切れたり玉が割れたりなど、様々な理由によって、ガラス玉などが組み替えられた可能性が高いものだと考えられます。冒頭で述べたように、骨董品として古物商など複数人を介し博物館に収蔵されていることの多かった首飾りは、その過程で、別の首飾りと玉を交換・組み合わせたり、さらには、一粒ずつ販売するためバラバラにされたことなどもあったようで、元の持ち主が実際の生活の中で使用していたときは異なる姿となって伝わっているものも少なくありません。

例えば、北海道博物館所蔵の首飾り（写真4）は、1913年に大阪天王寺公園で行われた『明治記念拓殖博覧会』で展示されたものであることが分かっていますが、その際撮影された写真と現在の首飾りを比較してみると、ガラス玉の数や配置が微妙に違っていることが分かります。紐も、現在は、白く太い木綿糸がガラス玉をつないでおり、こうした状況から、保管期間中に破損など何らかの事情が発生し、補修する際に紐や玉の順序が入れ替わった可能性が考えられます。



写真4 新しい紐は補修歴などを示す証拠の可能性が高い（北海道博物館所蔵）

耳飾りつきの首飾り？

このように、わずかな情報を手がかりにして、いろいろな視点から調査を進めています。最近、筆者が注目しているポイントの一つとして、耳飾りつきの首飾りの存在が挙げられます。

アイヌの首飾りには、写真5のように耳飾りがついた状態のまま現在に伝わっているものがあります。まるで飾りの一部のように見えるかもしれませんが、かつては耳につけていない耳飾りを首飾りにかけて保管しておいた、ということもあったようです。通常は、



写真5 耳飾りがついた首飾り（北海道博物館所蔵）

対になっている耳飾りを、首飾りの左右に一つずつ下げていることが多く、ときには2～3組ほどの耳飾りを下げたものまで存在します。

昭和初期に出版された本には、「玉飾と一緒につける耳環『ニンカリ』も普通一对二本つけるのに、死者の場合は三本つける」（杉山 1936：24）という記述も残されているので、装着時の決まり事などが存在していた可能性も考えられます。

また、明治～昭和初期頃に撮影された写真などを見ると、大小様々な耳飾りをつけた首飾りの様子や、それを身につけた女性たちの姿をよく確認することができます。いずれも、聞き取り調査や写真撮影時の正確な年代や地域といった情報が少ないものですが、こうした資料を一つ一つ丁寧に確認・整理し、つなげることで、時代ごとの身につけかたや特徴などを明らかにできれば、と考えています。

◆おわりに

「移入品」として紹介されつつも、「由来不明」とされてしまうことの多いアイヌの耳飾りと首飾りですが、多くの資料を丹念に見て、それぞれの差異や共通点を探っていくことで、これまで気づかなかった点や新しい見方ができる可能性を大いに秘めています。こうした作業は一見とても地味ですが、それによって、上述のように、耳飾りと首飾りがそれぞれ時代と共に姿形を変化させてきたことも、徐々に明らかになってきました。こうした作業を積み重ね、かつての交易ルートや生産地の解明につなげられるような、そんな研究を進められたら、と思っています。

皆さんも、今後、博物館などで耳飾りや首飾りを見かけたら、その煌びやかな姿がたどってきた道のりに思いを馳せてみてください。

<引用・参考文献>

- ・ 杉山寿栄男 1936（1974復刻）『アイヌたま』北海道出版企画センター
- ・ 関根達人 2014『中近世の蝦夷地と北方交易—アイヌ文化と内国化』吉川弘文館

※ この記事には、公益財団法人ポーラ美術振興財団による令和3年度調査研究助成「アイヌ民族の交易品服飾資料に関する基礎的研究北海道内の博物館所蔵資料を題材に—（研究代表者：亀丸由紀子）」の一部を使用しています。